

型程高率であつた。治療法については、近年、薬物による治療、自然分娩への傾向が著明で、観血的緊急遂娩の傾向は少くなっている。これは特に子癇において著明である。

23. (演) 晩期妊娠中毒症の 児の 知的身体的發育

(日医大産婦) 室岡 一, 玉野 豊, 代田治彦
須藤董穂, 田中 聡

(日医大精神) 小田原耕三

晩期妊娠中毒症が産後児の發育にまで影響を及ぼすか否かはむずかしい問題で、今日までの報告によると賛否交々決定し難い。当教室で調べた成績は次の通りである。昭和27~34年の間に出生した児 103例(正常妊娠26例, 晩期妊娠中毒症軽症45例, 重症11例, 混合型7例, 慢性腎炎合併7例)につき手紙で母子共に呼出し、児の知能、性格、身体發育、脳波などを調べた。その結果妊娠中毒症軽症は児の發育に何ら変化を及ぼさないが、重症及び子癇、慢性型に知能低下例が多く、その平均知能指数は推計的にも有意に低い。他方未熟児の知能も低く、その低下は生下時体重と有意の相関々係にある。そこで中毒症重症、子癇、慢性型の児の生下時体重を調べると正常より有意に少いから、中毒症のこの3群に知能低下の多いのは生下時体重の少い児が多いためとも考えられ、妊娠中毒症そのものの影響とは一概に云い得ない。

母体眼底所見、胎盤変化、分娩様式と児の發育には関係がない。

児の言語障害、精神發育、性格、知恵つき、体質、癖、偏食、就眠状況、夜泣き、夜尿、利手、家庭学校生活、交友、遊戯、歩行時期などいずれも妊娠中毒症と有意の関係はみられなかった。

24. (演) 妊娠中毒症およびその 後遺症に対するスルファミン系降圧利尿剤の臨床的比較検討

(国立東二) 久保 博, ※櫻井祐二, 小泉秀夫

昭和33年以来 Chlorothiazide (Ct), hydrochlorothiazide (Hct), hydroflume thiazide (Hft) Chlorothalidone (Hyg') を使用しその効果については一部すでに発表した。今回はこれら4剤の臨床的比較検討を試みた。

(1) 利尿効果 Hct, Hft は50mg宛連日, Hyg' は隔日または連日 100mg宛投与し観察したところ, Hyg' に有効例が多い感があり, Hct と Hft はほぼ同様な効果を認めた。(2) 降圧効果 安静により高血圧を示す症例に対し連日投与を行い4剤について比較した。少数例

であるが Benzothiadiazine 薬剤に有効例が多く認められた。(3) 血清電解質はいずれの薬剤とも短期間投与であるが, Na・K・Cl は不変か軽度の減少傾向がみられたのが大部分であつた。たゞ1例に初回妊娠時の Ct 投与で, 3年後の再妊娠時の Hyg 投与でそれぞれ低K血症の傾向を認めた。(4) 尿中電解質排泄量。Ct Hct Hft はほぼ同様な Na・Cl の著明増加とKの軽度増加を示した。Hyg' も同様な傾向であるが、前三者に比しK排泄量はさらに少ない例が多くみられた。(5) その他血清総蛋白, A/G, コレステロール値, ヘマトクリッド値, 残余窒素, 尿素窒素についても検討した。(6) 副作用 臨床ととくに著明なものはみられず4剤ともほぼ同様と思われた。なおこれら薬剤投与中に眼底出血, 網膜剝離, 子癇を起した症例がみられたことは本剤はあくまで対症療法であることを示唆している。

25. (示) 妊娠中毒症の成因に関する一考察と 当院に於けるその治療成績に就て

(公立豊岡病院) ※矢野一哉, 豊木 実
飯田清二, 鳥浜慶熙

妊娠中毒症の成因については、今日まで幾多の先人が、多大の努力をはらつて、その解明に盡力しつつあるにもかかわらず、未だその本体を極めつくしたとは言えず、「学説」の域を出てはいない様に思われる。今日迄の業績中、特に重要と思われるものは①アレルギー説②下垂体後葉ホルモン説③ACTH副腎皮質ホルモン説等があげられよう。

1893年 Schmorl の発見に論を發したアレルギー説は1930年 Arthus 現象の發表以来、旺んに応用され、我が国では松原氏反応(1947年)の發表もあり、1948年真柄教授は、水溶性のポリペプチット様物質を抽出し、それと前後して、加来教授(1952年)は多糖体様物質KPSがアレルギー病変の主因であると結論された。しかし、その後他の追試者の成績は必ずしも一致せず、アレルギー説に関しては、決定的な見解を得るには至らなかつた様である。下垂体ホルモン説は Hofbauer (1918年) 以来、幾多の研究の説が出されているが、今のところ、間脳一下垂体系機能失調によるものではないかといわれている程度で、有力とはいひ難い、またACTH、副腎皮質ホルモン説といへども、間脳一下垂体一副腎皮質機能失調に何等かの関連があるとも考えられる。

これ等の説よりみて、本症の成因は恐らく多元性的のもので、種々の因子が重つて、発症するのではないかと云う中津の考え方に興味をもち、本院に於て、妊娠中毒症